私と図書館

図書館との関わり

心身科学部　片山 和男

図書館のことを考えていたらいろいろなことを思い出した。まず頭に浮かぶのがペギー葉山の歌、学生時代に出てくる「秋の日の図書館のノートとインクの匂い」のフレーズである。その昔、図書館といえば大学の顔であり、他の建物より厳かで威厳を備えていた。また、智の宝庫として誰からも一目置かれた存在であった。図書館を見れば大学のすべてがわかるとまで言われたものである。図書館に足を一歩踏み入れると、そこは冷暖房が完備し、静寂に満ちた別世界であり、読書に勉強に最適な条件を兼ね備えた場所であった。私は決して模範的な図書館利用者ではなかったがこんなエピソードがある。

個人的には、休息の場や待ち合わせの場として使っていたが、ある時、ある著名な教員に、「本に書かれたことを鵜呑みにしてはいけない。誤字、脱字はあるは、ときには偽りもある。人は活字を鵜呑みにしてしまう傾向があるが、それは危険だ。疑ってかかることも必要だ」と言われたのである。当初は半信半疑であったが、ある辞書で誤りを見つけてそのことを確認することができた。それ以降は、図書館は複数の辞書で確認できる格好の場所となり、よく通うようになったものである。辞書は開架式書架にあり、自由に出入りできたと記憶している。そこはウィンドショッピングと同じで、目的の書籍があるわけではないが、何気なく書庫を眺めていた時、「あ！こんなところにこんなものが」と、知的好奇心をそそるものを見つけた時のあの感動は今でもはっきりと覚えている。

図書館は図書館情報センターと名称が変わり、アナログからデジタルの時代となり、便利さは飛躍的に向上した。アイテムが分かればインターネットで簡単に入手でき、満足が得られる。しかし反面、好奇心など潜在的な欲望を満たしてくれる機会は剥奪されてしまったのではないだろうか。そんな危惧を持つのはアナログ人間の私だけでしょうか。